

株式会社 バクワークス

精密機器を保護するスポンジ内装材を美しく仕上げる

事業内容

防舷材から洗浄用スポンジまで

アクリル樹脂やゴム、スポンジなどを加工して、工業用製品を製作する専門業者。船の側面に取り付けて接岸時の衝撃を和らげる防舷材から、厨房機器の配管を洗浄するための小さなスポンジ材まで、さまざまな製品を手がける。最近では、精度や見た目の美しさが求められるカメラレンズや精密機器の収納ケース用の内装材製作を数多く引き受け、好評を得ている。

デザイナーの経験生かす

秋元将宏社長は、印刷技術者や写真編集者として働いた後、デザイナーとして活動。もともと同社は印刷物や展示ブース、店舗などのデザインを請け負う会社としてスタートしている。「バランス良く配置をしたり細部を整えたりすることは身に付いている」と秋元社長が振り返るように、これまでの経験が収納ケース用内装材の仕事にも生かされている。

株式会社 バクワークス

代表取締役 秋元 将宏
〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-1-19
TEL. 06-6786-4000 FAX. 06-6485-4418
資本金/3,000千円 従業員/1名
主な取引先/アルミケースメーカーなど
主な保有設備/カッティングプロッター、パーチカル裁断機、油圧裁断機、レーザー加工機、バンドソー
主力製品/スポンジ、ゴム、アクリル樹脂の工業用製品および加工品、精密機器の収納ケース用内装材

短納期 企画力 小ロット OK 量産 OK 試作 OK 連携力

補助事業

厚さに高精度が求められる

精密機器を保護する内装材は、アルミケースに収納する機会が多い。内装材が厚すぎればふたが閉まらず、逆に内装材が薄ければ保護材としての役割を果たさず、精密機器が破損する恐れがある。そのため厚さに関しては、特に高い精度が求められる。

8枚重ねで誤差が大きく

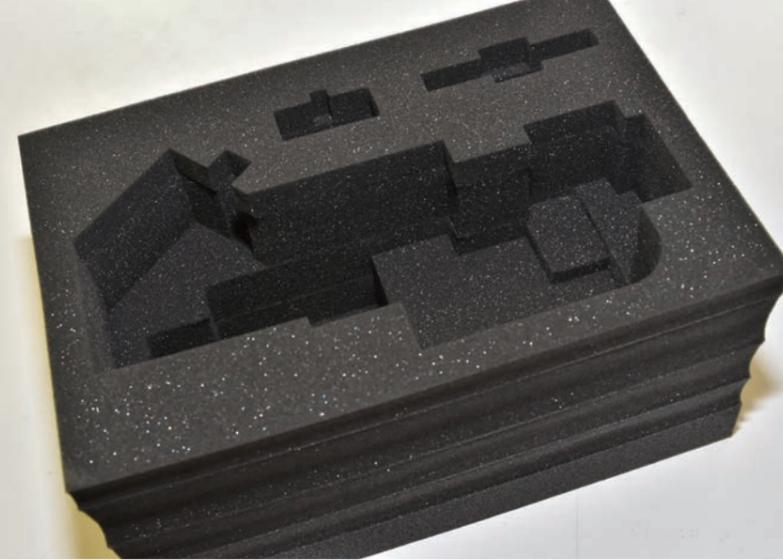
これまで使っていたカッティングプロッターは、厚さ20mmまでしか対応していなかった。そのため例えば厚さ150mmの内装材を作るためには、スポンジを8枚積層しなければならなかった。スポンジは1枚ずつ微妙に厚さが異なり、加工を加えるとさらに厚さが変化する可能性もある。結果として8枚を積み重ねれば誤差は大きくなり、厚さの調整に時間と手間を要していた。

今回、中小企業庁の「ものづくり補助金」を活用して、従来よりも加工可能な厚さ寸法が大きく、精度も高い機種を導入を決めた。

周囲に流されたり、常識に縛られたりせずに

代表取締役 秋元 将宏

今は1人で仕事をしているので、小回りが利くことが強みです。顧客に満足してもらえない高い品質を目指し、周囲に流されたり常識に縛られたりせずにものづくりに取り組んでいます。



収納物を保護する内装材



新導入のカッティングプロッター



スポンジをバンドソーで加工

具体的成果

新機種は厚さ60mmまで対応

カッティングプロッターは、コンピューターから入力される図形データに基づいて、スポンジなどのシートを切り抜くことができる装置。新たに導入した機種は、縦1,200mm、横2,000mm、厚さ60mmまでのサイズに対応する。厚さ150mmの内装材を製作する場合、スポンジ3枚の積層で済むので、従来機種に比べると作業効率は大きく改善された。加工精度も、これまで使っていた装置が±1mmの誤差だったのに対し新機種は±0.5mmと向上した。

要求精度の高い依頼が増える

厚さ20mm以上の素材の加工は、これまで外注で対応していた。新機種の導入で内製化が可能となり、外注費は従来の2分の1以下に圧縮できた。また、加工精度が上がったことで、短納期で小ロットの工業用部品や試作品の製作も引き受けられるようになった。新たにカッティングプロッターを導入したことを知った取引先から、これまで以上に精度の要求が高い依頼が舞い込むなど、「新機種の導入効果は、想像以上に大きい」と秋元社長は手ごたえを語る。

今後の戦略

複数の加工機を使って作業も工夫

カッティングプロッターやパーチカル裁断機、油圧裁断機といったスポンジ加工業者が一般に保有する設備に加え、同社ではレーザー加工機や木工用電動工具（バンドソー）も使用する。秋元社長が店舗の看板などを製作するために手に入れたものだ。

レーザー加工機でアクリル樹脂板をカットして型を作り、型に沿ってバンドソーでスポンジを切断して形状を統一している。また、バンドソーで切ると表面が粗くなるため、紙やすりで仕上げを施すこともある。「複数の加工機を組み合わせ、かつ作業を工夫することで付加価値の高い製品を生み出していきたい」と秋元社長は語る。

個人客に「かっこいい内装材」を

今後の目標は仕事量確保して「会社の人員を増やすことだ」と秋元社長は話す。現在、加工を担当するスタッフを募集している。さらに、インターネットを通じて、個人の顧客からの加工依頼も獲得していきたいと考えている。秋元社長は「モデルガンのコレクターなど、こだわりがある人に、かっこいいと感じてもらえるような収納用の内装材を作ってみたい」と意欲を燃やす。

取材を終えて

挑戦と遊び心が
技術や品質を向上する

通常、図面を基に加工作業をするが、収納物が送られてきて「これに合う内装材を作って」と、図面なしの依頼もあるという。「そんなときはちょっと欲を出して、レイアウトや収納の仕方をいつもとは違うものにと考えて」と秋元社長は話す。挑戦しようという気持ちや面白いものを作ってみようという遊び心が、技術を底上げしたり品質を磨いたりするきっかけになるのではないかと。秋元社長のスタンスから、そんなことを感じた。